## 第６章　世界と神と言葉

人と人が、意思を交わそうとすると、前提が必要になる。最初は共通性が作られ、お互いの前提が出来上がる。人同士の共同生活の中で、前提は共通化と拡大を始める。

お互いの前提が、共通化しながら拡大する中で、言葉、世界、神の領域などが同時進行的に成立する。

そしてこの中で、人は、世界の中で、言葉で考えるようになる。

### 第６章１項　認識の共通化と前提

人にとっての私は、脳の認識が前提になるので、生物的な内と外と違ったところに作られる。この範囲は、生物的な内と外より脳の認識が外側に偏るために、自己より広いことになる。マトリックス的な認識の相互作用が働き、共通化する。共通化が固定化すると、共通化した課程は、忘れ去られる。そして前提になる。通常は、前提は忘れ去られている。

### 第６章２項　共通化する私

共通化は、私にも作用する。そして人同士の集団を作る。自己の帰属が生まれ、私が帰属全体まで、拡大可能になる。特に外からの対象に対しては、自己の認識行動が、集団全体の私に置き換えが起こる。集団（私たち）が生まれる。

この集団（私たち）は、前提と共通化に支えられた集団であり、当然外が存在することになる。外も前提と共通化が進行する。

この過程で、内から見た外が共通化するが、この外は集団の認識における外になる。

この外は、特定の広がりは持つが、関係全体より狭いので、新たな認識対象が常に現れることになる。

### 第６章３項　世界と神と言葉の成立

前提ができ、認識のマトリックスと共通化の中で、共通化の象徴である言葉が、想像され生まれる。（私たち、族などの基盤）

外の認識領域に新たに出現する対象は、外以外から訪れるものとして認識される。この認識できない領域の存在が、共通化される。（神の領域の基盤）

そして、私以外の認識領域も併せて認識化される。（（人が住む）世界の基盤）

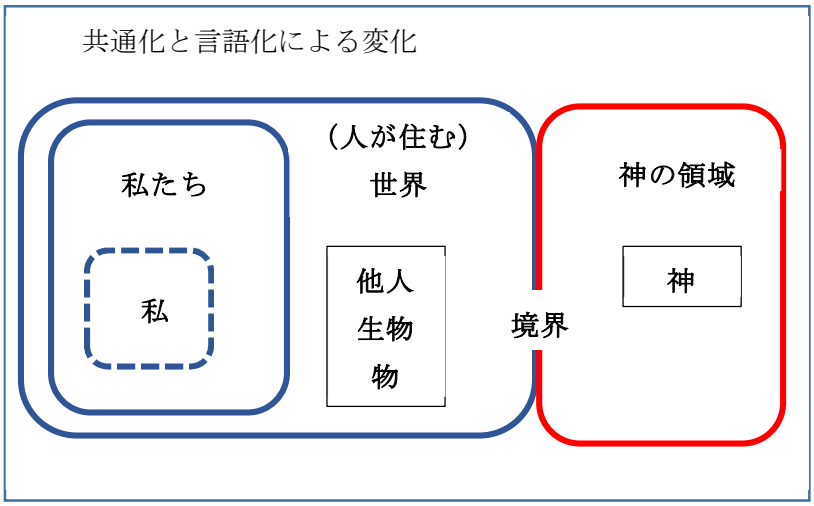
### 第６章３項補足　基盤は、単独では成立しない

ここで重要なことは、この基盤ができても、人の認識は、相互的であり、各々の基盤を、私から見て区分され、構造として認識可能なことである。この認識を含めて、通常の感覚器官（実体の認識器官）からくる情報と合わせて、脳が判断し通常の認識行動としている事である。

そのため各々の基盤は、完全に独立して認識はできない。一つの基盤に、変更が起これば、ほかの基盤も変更になることになる。

### 第６章４項　世界と神の言語化

言語が最終的に成立するためには、言葉が言語の領域である程度安定する必要があり、言語世界が必要です。そうでないと常に言葉に対応する内容との関係が、流動的になる為、固定化がうまくいかない。




世界と神の領域は、言語化しないと、はっきりとした形を、形成することができない。神の領域も世界も。実態としては認識できないため、言語として認識する必要がある。

前提の共通化と認識の言語化に伴って、世界と神の領域が、言語化され認識できるようになる。言葉も世界の成立で、言語の中の言葉として安定化する。

神の領域の住人として神も成立する。

### 第６章４項補足　世界と神

世界の成立には、どうしても世界に対応する視点が欠かせない。外の存在なしに、世界と言うくくりができない為、神の領域がどうしても必要になる。また人の認識は、自己の認識と大きくかけ離れないので、外から新たな認識が、常に起こっている。そのため領域が、認識できない領域と認識領域に分割され、神の領域と世界が認識される。

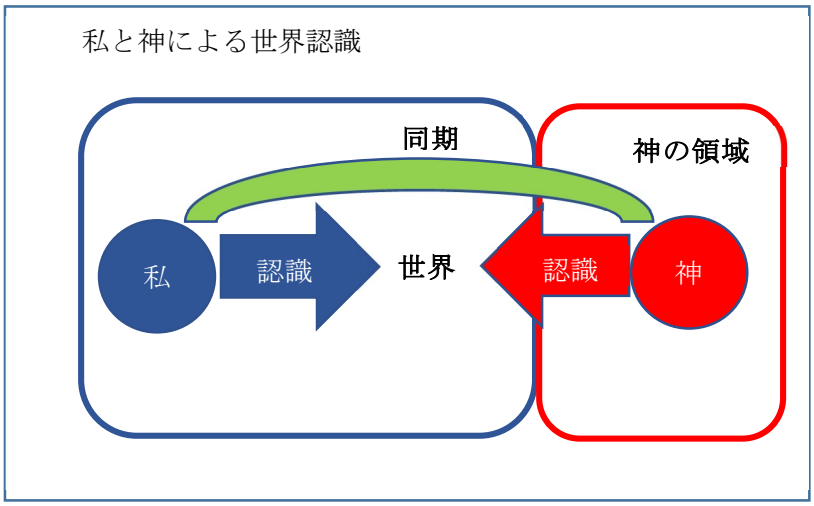
そして世界（人が住む）と人に対応して、神の領域の住人として、神が想定され成立する。

言葉と世界と神が安定的になると、成立以前の事柄は忘れられる。そして通常は、世界の中で、言葉で考えて、活動するようになる。そして非日常において、自己と己の構図と、中心がない私を使って、神の領域の住人として通常認識できない神が想定される。

## 第６章５項　私と世界と神（神の領域）

私と世界と神が成立する。この中で、私と神の構造が、人の認識の構造と同じ構造を持つため、私と神の同化が起こる。

私が、神の領域を往来することになる。そしてこのことは、神と私の変化は、同期することになる。




そして世界は、神と私に対応した私に、認識されることになる。